

祭 儀	■ 月次祭	2月1日(月) 午前10時 神殿	■ 建国記念祭	2月11日(木・祝) 午前11時 神殿
	■ 天長祭	2月23日(火・祝) 午前11時 神殿		

丑年 飛躍する院友

難局だからこそ
国学院の精神を

新型コロナウイルスに世界中が翻弄され、先行きが見通せない今の時代、日本国内でも再び緊急事態宣言が出されるなど多くの場面で制約を余儀なくされている。そんな時代にあつて、当初は「不要不急」と厳しい視線が向けられたエンターテインメントの世界に、長引く自粛生活を乗り切る活力として注目が集まりつつある。リアルな舞台にこだわってきた作り手側も、「時代のツール」を活用した動画配信など従来にない手法を模索し、新たな情報発信の方向も見いだしている。

伝統芸能の世界で活躍する院友(卒業生)も例外ではなく、コロナ禍によって表現の場が奪われた。しかし、国の重要無形文化財でユネスコの無形文化遺産にも登録されている「能楽」の世界では、国学院大学のサークル「国学院大学金春会」を通じて師弟となつた山井綱雄さん(平8卒・104期文Ⅱ写真左)と村岡聖美さん(平18卒・114期日文Ⅱ同右)が、「コロナ後」を見据えて活動を続けている。

金春会の創設者でもある山井さんは、「自然を支配しようという欧米的思考ではなく、国

学院の中核である神道に即した共存を目指す考え方に切り替えてもいいのでは。能楽など日本古来のものがヒントになるはず」と熱く語る。弟子の村岡さんも「同世代の3人で立ち上げた『みはるかす』を、コロナ禍という困難な状況ではあるが成功に導きたい」と気を吐く。

コロナの収束が見えない令和3年の幕開け。「師弟となつて18年で初めて」(山井さん)という院友師弟の対談から、コロナ禍に直面しつつ伝統を次世代に継承しようと飛躍を期す新たな年を見通してみたい。

6・7面に関連記事

みはるかすもの

「三人寄れば文殊の知恵」で知られる文殊菩薩。その霊獣である「獅子」は子を千尋の谷底へ突き落とし、自力ではい上がつた子だけを育てる。能の「石橋」や歌舞伎舞踊の「連獅子」などで知られる故事である。一人前になる子に試練を課すことは世界中で見られる▼遊園地などでアトラクションとして人気のバンジージャンプ。元をたどると、南太平洋の島国・バヌアツ共和国のナゴールという成人儀礼だ。植物のつるやつたで建てた高さ30メートルほどのやぐらの上から、足にくくりつけた1本のつるを命綱に飛び降りる。島で生まれ育った男性は飛び降りないと成人とは認められないとい



人通りが減った渋谷キャンパス

政府の緊急事態宣言を受けて国学院大学は、1月8日から30日までの授業についてハイブリッド授業を原則として遠隔授業に切り替えるなどの臨時的な措置を講じることを決定した。今回の措置の内容は、次の通り。なお、遠隔授業は変更せず、補講はすべて実施する。

▼ハイブリッド授業＝原則として遠隔授業に切り替える。例外として特段の事情がある場合には、ハイブリッド授業を継続する。

▼実技・演習系の対面授業＝遠隔授業に切り替えることがある。

針本正行学長は8日、「学生の皆さんは、この災禍の中にあつても、さまざまな授業形態を通して学びを深めてください。また、自分自身を感染から守ることが、他者を守ることに成るといふ社会の一員としての自覚をもち、日々の生活を送るよう切に願います」とのメッセージを公表した。

また、学生部は緊急事態宣言下における課外活動を自粛するよう要請している。

再びの緊急事態宣言 授業の実施形態を一部変更

年頭所感



新たな「学び」に期待

学長 針本 正行

あけましておめでとうございます。あたらしき年を皆さまとともに言祝ぎ申し上げます。

旧年は、未曾有の災禍が続き、日常生活、学生生活のあり方が問われた1年でありました。大学は、新型コロナウイルスの感染拡大にあって、全学で遠隔授業を導入し、学生と教職員とが共同でコロ

ナ禍における学修活動を模索し構築してきました。学修環境、教育環境がそれぞれ異なるにもかかわらず、ご理解、ご協力をいただいたすべての皆さまに深く感謝いたします。大学は、令和3年度の授業実施に向け、教員と学生、学生と学生が、直接関わり学び合う学修活動がかけがえのないものであることをふまえて、

受講生数、教室収容人数に制限を設けるなどの3密対策を講じつつ、できるだけ多くの授業を対面で行うことを基本方針としました。また、一部の大人数授業は原則としてオンデマンド方式によって実施することとしました。新しい年が皆さんにとって意義あるものとなるように、教職員が一体となって、教学運営に努めてまいります。

「春のことぶれ」を知らせる木々の芽吹き、鼓動を遠隔授業や課外活動を通して感じています。学生の皆さんが現在、対峙しているさまざまな困難を乗り越えて学修活動に挑み、皆さん一人ひとり

令和3年度の授業実施方針を決定 全授業の8割で対面実施目指す

針本正行学長は「すでに令和2年度後期から一部で対面授業を再開しており、あらためて対面授業のかけがえのない価値を確認しました。一方で、前期の遠隔授業では、高い学修成果が得られ、学生の好評を博した科目もありました。今後は対面授業を再開しつつ、あわせて質の高い遠隔授業の開発にも取り組んでいく所存です」としている。

なお、今回決定した授業実施方針は、今後の感染拡大状況や社会情勢によって変更する場合があります。

新春を迎え、謹んでご祝詞を申し上げます。

いまだ新型コロナウイルス感染症収束のめどが立っておりませんが、昨年は「コロナ禍による退学者は1人も出さない」という強い決意のもと、緊急修学支援費の給付をはじめとするさまざまな支援策を講じてまいりました。また、大学ホームページを通じて支援募金をお願い

したところ、卒業生をはじめ保護者の皆さま、そして教職員ら国学院大学に関わる多くの方から心温まるご寄付をいただくことができました。心より感謝申し上げます。

さて、このような状況の中において、本学が平成14年から取り組んでまいりました「21世紀研究教育計画」の第4次も、いよいよ最終年を迎えます。また、

次の第5次計画を策定する大事な1年でもあります。第4次は大学だけの計画ではなく、法人各設置校の取り組みとしたことで、法人全体の一体感が生まれ、人間の連携がより一層強固なものとなりました。第5次を策定するにあたっては、第4次で明らかにした課題の解決を目指すことはもちろんですが、それぞれの就学年齢の皆さんがどのような教育機関を求めているのかを分析し、これまでの法人のイメージを一新するような教育計画の策定に取り組む必要があると考えております。

本年が皆さまにとってよりよい1年となりますようご祈念申し上げ、年頭のご挨拶といたします。



次世代に求められる法人であるために

理事長 佐柳 正三

修をされるなど、世界的な彫刻家でもあります。本学の渋谷キャンパス再開発にあたり、神殿前に2つの石が天高く伸びる様子を表現したモニュメント「翔」を制作されました。本学に集う若人の成長と、創立138年の伝統を誇る本法人の限らない発展を表現されたものです。教育界を取り巻く環境は、ますます厳しい状況にあります。固い絆で結ばれた「オール国学院」の力で、「翔」に込められた願いを実現しようではありませんか。

歳旦祭を斎行

歳旦祭が1月1日、渋谷キャンパスの神殿で執り行われた。斎主の大野靖仁神殿奉斎員（法人事務局部長）が祝詞を奏上し、今年1年の平安と本法人の隆昌、新型コロナウイルスの早期収束を祈念した。

今年は、新型コロナウイルスの感染防止対策の一環として参列は佐柳正三理事長、針本正行学長をはじめ、一部の本法人の役教職員らに限られ、来賓や学生らの参列は見送られた。佐柳理事長は「未曾有の難局だが明るい未来が待っているはずだ。アフターコロナの時代に、前例にとられない新しい変革の道を一致団結して進んでいきたい」と挨拶した。



新学部設置準備室・下村教授 文化庁長官表彰を受賞

日本の文化振興に貢献した人に贈られる令和2年度の文化庁長官表彰に、新学部設置準備室の下村彰男教授が選ばれた。

文化庁の日本遺産審査委員会委員（委員長）を務める下村教授は、長年にわたり、文化、観光の分野において、日本遺産の設立や日本文化の継承と発展に尽力するとともに、その普及や振興にも寄与し、わが国の文化遺産の振興に多大な貢献をしていることが認められ、今回の表彰となった。

表彰式は昨年12月17日、都内で行われ、宮田亮平文化庁長官から表彰状が手渡された。今年度表彰には下村教授をはじめ76人と1団体が選ばれている。下村教授は表彰式を終え「地域の文化資源をまちづくりに生かす活動の促進・支援で表彰されたことは、文化に対する考え方や取り扱いのあり方の変化を示すもので、私たちの教育や研究の励みになると考えています」とコメントした。



留学を目的とする休学 新たなガイドライン策定

新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大し、収束する兆しがみえないことをふまえ国学院大学は、学生の安全を確保するため、令和3年度以降の留学を目的とする休学について新たなガイドラインを策定した。

渡航先が、外務省発表の危険情報と感染症危険情報のレベルにおいていずれも1以下の場合に限って認めることとし、いずれかがレベル2以上の地域への渡航を伴う留学については、「当該留学を目的とする休学」を認めないこととした。このガイドラインは1月18日以降の休学申請から運用する。

国際研究フォーラム 「見えざるものたちと日本人」 オンラインに150人以上参加

研究開発推進機構日本文化研究所は昨年12月19日、国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」をビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」で開催した。

海外の大学からも含め150人以上が参加。一般向けに公開されていない写真や絵画資料などを見ながら、日本人と神、幽霊、妖怪、鬼などのさまざまな「見えざるものたち」との交流に思いをはせた。

フォーラムでは、明治時代に活躍した作家、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）のひ孫で、小泉八雲記念館（松江市）の小泉凡館長ら3人が講演。同研究所の平藤喜久子所長が司会を務めた。講演後、コメンテーターとして参加した本学文学部の飯倉義之准教授と神奈川大学の藤澤茜准教授が、講演の参考となる資料などを紹介した。

フォーラムの最後を飾る総合討議では、3人の講演者とコメンテーターが、講演内容に関して意見を交換。質疑応答では、視聴者から10を超える質問が集まり、3時間半に及んだフォーラムは、盛況のまま幕を閉じた。

教育開発推進機構 FD講演会 コロナ下の授業 海外の事例に学ぶ

教育開発推進機構は、本学専任教職員の教育力向上を目的に「令和2年度オンラインFD講演会」を1月31日までオンラインで動画配信している。動画は専任教職員のみが視聴できる。

講演会では、インドネシア・ジャカルタの私立ナショナル大学文学部日本語学科のウチュ・ファディラ氏が「COVID-19パンデミック下の高等教育～インドネシア ナショナル大学の事例～」と題して、オンライン授業の様子を報告。ファディラ氏はインターネット環境が不安定な中、通信アプリ「LINE」などを利用して効果的な授業ができた」と振り返った。

FD講演会に海外からのゲストスピーカーを招くのは今回が初めて。

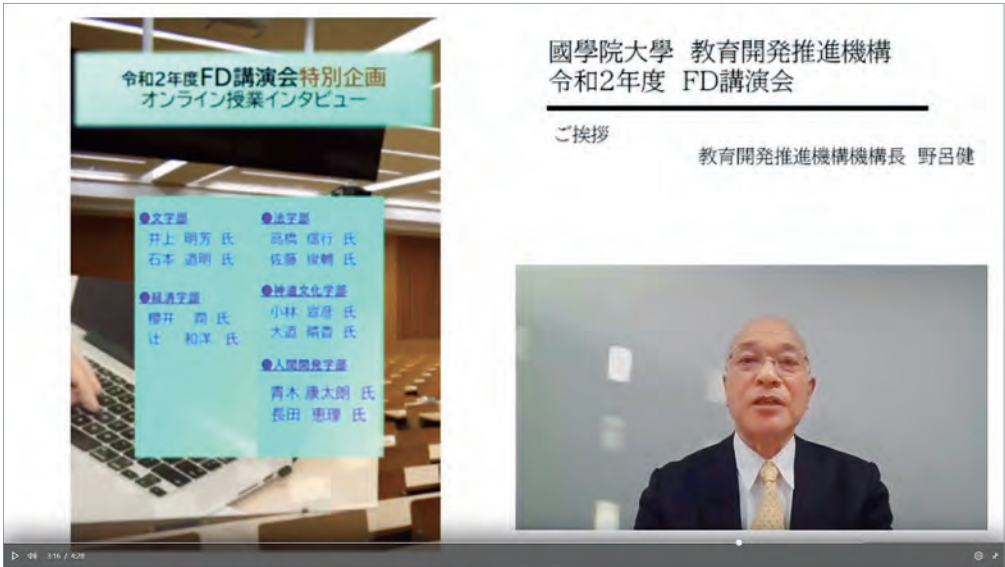
学修支援センター インクルーシブな学びを 考えるセミナー

教育開発推進機構学修支援センターは多様性を尊重した学びの支援を考えるオンラインセミナーを昨年12月23日、「Zoom」を使って開催した。

司会の鈴木崇義教育開発推進機構准教授は、「障がい学生支援に関する基本方針に基づく支援として、令和2年度は679の授業で配慮・支援がなされている。過去には、体調が悪くなった時に退出を認めるなどの支援を行ってきた」と紹介。「目に見えることだけでなく文化や言語など周囲にはさまざまなバリアがある。バリアに気づくことがとても重要」と話した。

続いて学部入学以来、ノートテイクによる授業の情報保障の支援を受けている大学院生とノートテイク経験者の学生がそれぞれの体験談を披露した。大学院生は、現在の遠隔授業では、チャット機能を使ってノートテイクを受けていることなどを説明した。

締めくくりとして鈴木准教授は「学修の上で困ったことがあったら、学修支援センターに相談を」と呼びかけた。



「先生方の生きた実践は本学の貴重な財産になる」と挨拶した教育開発推進機構の野呂健機構長

教育開発推進機構は、専任教職員の教育力向上を目的に行う「令和2年度FD（ファカルティ・デベロップメント）講演会」の一環として、特別企画「オンライン授業インタビュー」を実施した。動画の配信は専任教職員限定で1月31日まで。

国学院大学は新型コロナウイルスの感染拡大防止策として昨年5月からオンデマンド方式やライブ配信などの遠隔授業を実施している。今回のインタビューには各学部から2人ずつ、計10人の教員が出演し、前期授業の様子や活用したツール、有効だった工夫などを振り返った。

今年度から本学に着任した神道文化学部の大田晴香助教は、「宗教社会学」の授業を学生が自身で視聴のタイミングを選べるオンデマンド形式で実施した実績を紹介。学生がパソコンやスマホなど、さまざまな電子機器で視聴することを想定し、1枚のスライドで効率よく学べるよう構成を工夫したことや見やすいように文字を大きく設定したことなどを報告した。

大道助教は「毎回の課題に意欲的に取り組めるよう文字数に配慮し、余裕を持って課題提出できる期限を設定した」と話した。

法学部で「国際政治入門」の授業を担当する佐藤俊輔専任講師は、オンデマンド配信であっても対面授業のような双方向性を確保するための取り組みを報告し、「授業後のアンケートに書き込まれた質問に答える動画を、講義形式の動画とは別に収録し質疑応答に手厚く対応した」と話した。その上で「学生が授業内容を理解しやすいよう努めた」と結んだ。

人間開発学部で外国語教育の指導法などを受け持つ長田恵理准教授は、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」を使用しリアルタイムで進行するライブ授業の様子を振り返った。ウェブ上でも対面授業のような臨場感を目指し、オンラインのホワイトボードツールなどを導入。「通常授業と同様の感覚で共同作業ができる方法を考案した」と話した。

10人の教員による報告は、より質の高い遠隔授業を今後実現していく上での一助となりそうだ。



有栖川宮幟仁親王

有栖川宮幟仁親王（文化9（1812）年～明治19（1886）年）は、皇位継承資格を有する四親王家の1つ、有栖川宮家の第8代にあたり、国学院大学の経営母体であった皇典講究所の初代総裁である。

有栖川宮家は、家学を歌道・書道として歴代天皇の和歌と書の師範を務め、特に書道は「有栖川御流」として知られている。幟仁親王は明治天皇の師範役を務められ、明治維新に際しては五箇条の御誓文を揮毫された。

明治維新以降は、神祇事務総督、神祇事務局督として神祇行政を総括された。また、皇族中の最長老として、宮中での祭祀にはよほどの体調不良でない限り老齢に至るまで参拝され、時には明治天皇の大御手代を務められた。

明治5年以降の国民教化運動（大教宣布運動）の不調と、いわゆる「祭神論争」によって神道界が二分されていた14年には、神道界統一の象徴として神道教導職総裁に、勅命により推戴された。そして、総裁職就任後の同年12月1日に自ら参内して奉聞書を奉呈され、「御国体ヲ維持仕候ハ御敬神ヨリ外無之ト奉存候」と国体の基盤たる神道とその根本精神である「敬神」について上奏された。

翌15年に国民教化運動から神官が分離されると、神道の拠点となっていた神道事務局の教育機関である生徒寮を基盤に、神職養成と日本文化の講究を担う神道・国学の学校の創設が政府・神道人・国学者らによって志向された。こう

研究開発推進機構助教
高野裕基

教育開発推進機構FD講演会 特別企画 教員がオンライン授業を振り返る

● 皇典講究所の発展と人材育成に尽力

初代総裁 有栖川宮幟仁親王

して皇典講究所の創設が導かれ、同年2月1日、明治天皇の聖旨により幟仁親王は皇典講究所総裁に就任されたのである。

同年11月4日の皇典講究所開校式において幟仁親王は告諭を発せられ、日本の「国柄」を明らかにし（国体ヲ講明）、道徳・道義心をそなえた「人柄」を養い育む（徳性ヲ涵養）ことで、伝統文化に基づく日本の根本を究明する（本ヲ立ツル）ことが「学問ノ道」において最も重要であるとの精神を示された。この精神は、現在でも国学院大学の建学精神（神道精神）の基礎をなしている。

なお、幟仁親王は、19年に薨去されるまで、皇典講究所の拡充発展と人材育成に尽力された。その一方で、同所総裁となられて後、改めて神道総裁にも就任され、皇典講究所や神社神道のみならず教派神道とも関係を持保持されて、あまねく神道界に携わられた。

このような幟仁親王の御事績は、建学の精神として神道精神を掲げる国学院大学の研究・教育における理念や特色、社会における役割や使命を体現しているといえる。

疫病・災害を克服してきた神道 文化講演会で岡田名誉教授



講演する岡田名誉教授（YouTube から）

コロナ禍という異常事態の中、国学院大学文化講演会が11月25日から12月末までオンラインで公開された。時世を反映して「古代の祭りと疫病・災害」をテーマとした本学の岡田莊司名誉教授による講演は、1600回を超す視聴回数を記録した。

第一部「『日本書紀』神話と古代祭祀」で岡田名誉教授は、「疫病や災害などの苦難を克服するため、古代の共同社会において神道や神社が発生した」と指摘。さらに、地域信仰と天皇祭祀の二重構造である神道について「崇神天皇の時代に疫病が流行し、それを鎮めるために天照大神を宮殿の外でお祀りするようになったことが起源」とし、日本列島を襲う疫病や災害の多さが神道発展の要因であることを伝えた。

第二部「平安時代の信仰と都市祭祀」では、仏教と融合した神仏習合によって神道が「現世利益」を担う宗教へと変貌し、それによって生み出されたのが「疫病や地震などの災害を鎮めて地域に安心をもたらすため、神輿が巡行する『御旅所祭祀』としての都市祭祀」とし、その代表に京都の祇園祭や東京の神田祭、三社祭などを挙げた。

締めくくりとして岡田名誉教授は「古代祭祀や祇園信仰など都市祭祀に、疫病や災害との戦いが反映されてきた。神道の一番大事なところに、苦難を克服してきた日本人の歴史がある」と強調した。

若木育成会 修学支援へ助成金

在学生の保護者らで組織される「若木育成会」（堀江久教会長）は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、令和2年度予算に「特定感染症等学生支援助成金」を計上し、助成を行うこととし、令和2年6月の本部総会（書面審議）で承認した。助成総額は1億7000万円。

この事業は、国学院大学が行った、学生が遠隔授業を受講するための機器備品の整備と、学生生活を継続するための経済支援の「緊急修学支援費」への助成を目的としたもの。

若木育成会50周年記念事業 3号館学生ホール床面を改修

「若木育成会」は、令和2年度に結成から50周年の節目を迎えた。50周年記念事業の一環として、渋谷キャンパス3号館地下1階の「若木育成会学生ホール」で床面の改修工事を実施。このほど工事が完了した。同ホールは同会結成40周年記念事業の一環として寄贈され、学生たちの憩いの場や自習スペースとして活用されている。2月に記念のプレートを設置する予定。



就職活動ワンポイントアドバイス 自己PRと志望動機は表裏一体

これから本格的に採用面接に挑む学生の皆さんは、「面接は、相手から聞かれたことを答えればよい」と思っていないでしょうか？

会話は一貫性があるかどうかがとても大事です。「あなたを漢字一文字で表したら何ですか？」などと、企業の面接では不意な質問をされることがあります。予想外の質問ではつい本音が出るからです。企業は、学生が準備してきた志望動機や自己PRだけでなく本音の受け答えも総合して人物を評価します。だからこそ、一貫性が問われるのです。

志望動機を問われた際、自分自身のこれまでの経験と企業との接点を見つけることが重要になります。自分の経験や考え、つまり自己PRと志望動機は表裏一体です。

ご自身の書いた文章は、第三者が志望動機を読んだときに、学生時代の経験に裏打ちされて、会社のどの部分にひかれ、志望に繋がったかが納得できるストーリーになっていますか？

キャリアサポート課では、先輩たちのエントリーシートを閲覧することができますし、添削も行っています。困ったときは活用してみてください。

【キャリアサポート課監修】

お詫びと訂正

国学院大学学報696号9面「高校生向けコンテスト入賞作決定」の中で紹介した第16回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト地域民話研究部門(団体)の最優秀賞受賞作品名に誤りがありました。正しくは「民話の伝承と古代下野国における交通網の関係～地域の民話から史実を探る～」(栃木・矢板東高 リベラルアーツ同好会)です。お詫びして訂正します。

花田植の飾り牛

文学部教授 小川直之

年頭コラム 今年の干支にちなんで

広島県西北端に位置する北広島町壬生には「花田植」という行事が伝承されている。「壬生の花田植」の名称で国の重要無形民俗文化財に指定され、ユネ

スコの無形文化遺産代表一覧表にも記載されていて、毎年6月第1日曜日に壬生の水田で行われている。

これは「雛子田」とも呼ばれ、サンバイと呼ぶ2人の音頭取りが、両手に割竹の楽器であるササラを持って叩きながら田植唄の上の句をオヤウタとして歌うと、着飾った早乙女たちが下の句を歌いながら揃って稲苗を植えていく。一線に並ぶ早乙女の背後では、男性たちが小太鼓、大太鼓、笛、手打鉦で田植雛子を奏でるが、なかでも大太鼓は飾り房が付く檮を両手に持って高く掲げたり、投げあげたりしながら叩き、音に加え動作でも田植を囃している。この雛子田植は、壬生と川東の2つの団体があって、同時に田に入



花田植の飾り牛「小川教授提供」

壬生の花田植（サンバイ・早乙女・雛子）「小川教授提供」

り、田植唄は田の神迎えの朝唄から始まり、昼唄、晩唄と現在では18曲が歌われている。この雛子田でもっとも特徴的なことは、田植に先立って背に飾り鞍を付け、幟と花傘を立てた「飾り牛」が田の代掻きを行うことである。昭和30年代から動力耕耘機などの普及によって、日本では農耕に牛馬の姿はほぼなくなっていて、役畜による農耕はこうした場面以外では見られなくなっている。

壬生の花田植の飾り牛は、安芸高田市の杉原牧場と北広島町の大朝飾り牛保存会が担っていて、オモウジ（先牛）と呼ぶ先導の牛に続いて十数頭が代掻きを行っている。それぞれの牛は代掻具の馬鍬を引き、牛を操る「追い手」が付くが、代掻きでの田の巡り方には「水見」「八の字」「縦鍬形」「横鍬形」「八重だすき」「鶴の舞もどき」など、いくつもの型があって、実際の農耕というよりも牛を飾って誉める代掻き祭りともいえる性格をもっている。

こうした飾り牛の代掻きがいっから始まったのかは分からないが、津和野藩の国学者である岡熊臣は文化8（1811）年4月28日に岡原（現北広島町）で壬生の花田植と同じような雛子田を見ていて、飾り牛は松竹や鶴亀の飾りや色紙の幣のようなものを附けた鞍をのせていると記している。中国地方では「大山牛供養」などといい、大山の神仏による牛守護と牛霊供養の祭りが各地にあり、花田植の飾り牛はこの祭りとも関連をもっている。近畿地方などには牛を神とする「牛神」伝承もあって、牛は人とともに生きてきた動物だった。

コロナ禍の学生寮は今

資格勉強で時差夕食 寮生同士で感染予防の声がけ

新型コロナウイルスの感染拡大により再び緊急事態宣言が発令される中、国学院大学の学生寮では、ふるさとを離れて暮らす寮生たちが感染症対策を徹底しながら共同生活を続けている。

共同生活は、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会が注意を促す「5つの場面」の1つに挙げられているが、寮生たちは感染

予防に気をつけながら、「今だからこそ、できることを」と前を向き、将来を見据えた勉学や就職への準備に励んでいる。

司法試験に挑戦

「コロナ禍がなければ、司法試験に挑戦しようとは思わなかった」

た。「学寮まほろば」（男子寮、川崎市宮前区）で生活する男子学生（神文3）は、こう話す。

男子学生は大学院への進学を志望する傍ら、行政書士や社会保険労務士などの資格取得を目指して学外の予備校にも通学。また、本学内のサークル3団体に所属するほか、家庭教師のアルバイトもこなしながら、多忙な日々を過ごしている。

ている。

ところが、コロナ禍で登校もままならず、日常が一変。「生活の中で空き時間が増えた一方で、就職活動の先行きも不透明になり資格は多く持っているほうが有利だと考えた。そこで、せっかくなら空いた時間を有効に使うと、司法試験の勉強を始めた」と明かす。

寮内には食堂や自習室、浴室、トイレなど共用設備が多い。「手指の消毒やマスク着用など、できることをしっかりとしようという心がけている。食事時間は決まっているが、予備校から帰ってくる時間が遅いので、夕飯時の食堂には私1人のことがほとんど」。結果的に他の寮生とは時差のある夕食になっているという。また、寮生の多くが実家に戻ったため、「自習室も、ほぼ独占状態」とも。

ただ、友人らとなかなか会えないことは、やはりストレスだという。それでも、「考えていても仕方がない。短期目標の大学院合格、そして人と会えないことの代わりを選ぶことができた道だと思つて司法試験に向け頑張るだけ」と先を見つめる。

部活やめ就活備え

「学寮常磐木」（女子寮、横浜市青葉区）に入寮する女子学生

（日文2）は、コロナ禍をきっかけに所属していた体育部会を退部した。「コロナ禍で学生生活に対する考え方が変わった。部活の間も大切だけど、もっと将来にかなげられることが他にあるのではないか」と思い、勉学や就活に力を入れようと、思いきって部活動をやめた」

女子学生は退部後、就活セミナーやインターシップにオンラインで積極的に参加している。「コロナ禍の収束後にもしっかりと適応できるように今は備える時期」と堅実だ。

寮内では「密」を回避するため、恒例だった季節ごとの催しなどが軒並み中止になっている。「以前はロビーなどで他の寮生と集まっておしゃべりをしたり、テスト前には励まし合つて学修したりしながら親交を深められて楽しかったのに」と女子学生。とはいえ、「巣ごもり」を楽しむ術も見つけた。寮で昼食は提供されな

いため、「新しいチャレンジを」と昼食の自炊を本格的に始めたという。

寮内の感染症対策としては、毎朝の検温がルール化され、食堂に置かれた名簿に体温を記入するのが日課だ。また、共同生活ならではといえる寮生同士の自発的な声かけも頻繁に行われている。女子学生は「お互いに感染しないように『手、洗いにしよう』『マスク、忘れてるよ』と呼びかけ合っている」と話す。

こうしたコロナ禍の寮生たちの姿について、「まほろば」寮長の佐久間英男さんは「密」を避けるために寮生同士の交流が少なくなり、コミュニケーション不足で勉学や就活などの情報交換ができなくなっている現状が心苦しい」と漏らす。秋からは対面授業が一部再開され、寮生たちも徐々に登校できるようになってきた。佐久

学寮のご案内

国学院大学は、本学学生専用の男子寮「学寮 まほろば」、女子寮「学寮 常磐木」を設け、地方出身の学生の生活を支援しています。

学びに集中できる設備と環境を整え、学生寮ならではのサポートで、学生生活を支えています。（完全個室制、朝夕食事提供あり、寮長・寮母常駐）

在学生の皆さまで、令和3年4月からの入寮をご希望の方は、下記までお問い合わせください。諸条件は大学HP（QRコード）を確認を。



問い合わせ先

- 学寮 まほろば
（株）共立メンテナンス ☎0120-88-1030
- 学寮 常磐木
学生事務部学生生活課 ☎03-5466-0145



※2つの学寮では、新型コロナウイルス感染防止のため日々対策に取り組んでいます



マスクを着用し、距離をとって自習をする学生たち
学寮常磐木



間仕切りが設置された食堂学寮まほろば

間さんは「寮生のストレスが少しは緩和されたのではないかな。ただ、ストレスの解消が気の緩みにつながらないよう見守っていきたい」と話している。

◇

本学の学生寮は、「学寮まほろば」「学寮常磐木」の2施設がある。いずれも寮長と寮母が常駐する。平成30年開館の「まほろば」は居室の他に共用スペースが多いのが特徴で、「常磐木」は本学による選考と研修を経た上級生がレジデントリーダーとして共住し、寮生の多様な相談に対応。現在の入寮者数は「まほろば」が46人、「常磐木」が35人。

設立から間もなく 30年の金春会

山井 祖父が金春流能楽師だったので小さい頃から能楽師になると決め、国学院大学入学後は金春流のサークルを作りたいと、年が明けた平成5年1月に「国学院大学金春会」を設立した。その際には、既に活動していた「国学院大学観世会」や「早稲田大学金春会」の先輩方に世話になった。創設メンバーは10人ほど。それまで人に能楽を教えたことなどなく、今考えるとまごとのようなものだが、まず能に親しもうという感覚だ。

設立から30年近く経過するが、最終的な目標は学生に能舞台の上で能を演じてもらうのが理想。ちゃんと装束と面を着け、プロの能楽師に囲まれて演じることを念頭に、発表会や若木祭で紋付袴姿の「仕舞」とい

う形で発表している。**村岡** 金春会からは私を含めて2人がプロの能楽師となった。現役の学生たちは、コロナ禍の影響で現在学内での活動ができず、私や山井先生の稽古場に向いてもらって指導するのが近況だ。熱心な学生は自分たちで公共施設を借り、自主練習もしている。不定期だが週に1回以上は活動し、金春流宗家一門のアマチュア合同発表会「金春五星会」(1月23日、国立能楽堂研修舞台)に向けて稽古を積んでいる。

能楽との出会い、歩み

村岡 大学で実際に能楽をやっているサークルに興味を覚えて新歓ブースに顔を出したところ、山井先生が熱い思いを語ってくれた。能楽に触れ、文章で見ていただけの世界を立体で表現できることに感動。4年間の



平成17年に能「羽衣」を初めて舞う学生時代の村岡聖美さん。後見には山井綱雄さん(左奥)がついた(村岡さん提供)

進を育てることは考えていたが、まさかこんなに早くとは思わなかった。

村岡 私の所属する金春流は先々代宗家の金春信高先生が女性能楽師の育成に力を注ぎ、山井先生の師匠である富山禮子先生を中心に女性能楽師の系譜がある。私もその流れを受けて数年前、同世代の女性能楽師3人による演能会「み絛之會」を立ち上げ、女性能楽師の未来を切り開いていくために活動している。

丑年 飛躍する院友

足元を見つめ 能楽を守る挑戦続く

金春流能楽師 山井綱雄さん、村岡聖美さん師弟

能楽の家に育ち、芸の世界へ進んだ山井綱雄さん(平8卒・104期文)と国学院大学金春会から能楽界に飛び込んだ村岡聖美さん(平18卒・114期日文)の師弟。全く異なる環境で能楽と出合った2人だが、新型コロナウイルスの感染拡大という異常事態に直面しながらも「今」に即した手法で「伝統を絶やさない」と一点を見つめている。

山井 能楽の観客やアマチュア弟子の8割以上は女性だ。プロの女性能楽師は2割程度だが日本の伝統文化の中では先進的に女性が進出している。中には「アンチ女性能楽師」の考えの方もおり、そういう方々を認めさせる気概でやらなければ意味がない。富山先生もおっしゃっていたが、女性にしかできない表現もある。芸を磨き続け、今の時代を意識しながら認めさせる努力をすべきだろう。

コロナ禍での能楽

村岡 能楽界全体がリモート稽古や動画配信に傾いてきたと感じるが、生の舞台上に飢えている人も多い。横浜の久良岐能舞台で、蠟燭能を舞った時も「久しぶりに贅沢な空間で味わえた」と喜んでもらった。生の舞台を届け続けるため、まずは興味を失われないよう動画も必要だろう。**山井** 4カ月も仕事が途絶えた

間に久良岐能舞台で「羽衣」を撮影し、「くらきSS能」と題してYouTubeで公開している。能のセリフは難しいので、天女が舞う脇に「衣を返して」と漫画風の吹き出しを入れたら学校の先生から反響があり、普及目的として使えることも分かってきた。

村岡 「コロナが落ち着くまで活動しません」という学生はいるが、熱心に活動する学生もいる。感染予防に留意したうえで稽古しているの、気兼ねなく覗きにきてほしい。

山井 平成30年に金春流として400年ぶりに復曲した「夕顔」を、この春に国立能楽堂で上演する(4月10日午後1時)。復曲のきっかけは、大河ドラマ「真田丸」の能楽指導と能場面主演に関わった際に「夕顔」を楽したという記録を知ったこと。先代宗家に話した

弟子から師匠へ
「み絛之會」の立ち上げでも背中を押してくれた。いつも新しいことに挑戦されているが、その裏には金春流を守るという強い気持ちがあると思う。能の世界を教えてくださった先生には本当に感謝してもらえない。いつかご恩を返せるよう、頑張りたい。

師匠から弟子へ

負のスパイラルに陥りやすく、マイナスのことをグルグル考えてしまう(笑)。物事は無駄なく、プラス思考で、最短距離で済ませたほうがいいに決まっている。とにかく楽しく明るく前向きに、時代を切り拓け！

能楽
能と狂言からなる伝統芸能。起源は奈良時代にさかのぼるとされ、室町時代の観阿弥・世阿弥親子によって大成された。「猿楽」と呼ばれた明治以前には足利義満、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康ら時の権力者に愛され、江戸幕府の下では「武家の式楽」として重視された。国の重要無形文化財、ユネスコ無形文化遺産。

能楽を構成する歌舞劇、謡(歌・セリフ)と囃子(楽器)に合わせて演じられ、主役の「シテ」や相手役を務める「ワキ」などの演者に分かれる。現在は「四座一流」と呼ばれる観世、金春、金剛、宝生、喜多の5流派が活動。2000、3000曲の演目が作られてきたが、現行曲は200、300曲ほど。近代以降に作られたものは新作能と呼ばれる。

金春流
大和猿楽の流れをくむ能の流派。室町初期に世阿弥の女婿・金春禅竹が中興の祖となり、後に豊臣秀吉の庇護を受けて全盛期を迎えた。「四座一流」の中では最も古風な芸風を残す。現在の家元は81世金春慈和。



インタビュー(上)



インタビュー(下)

国立能楽堂公式HP
<https://www.ntj.jac.go.jp/nou.html>

山井綱雄 YouTube 公式チャンネル
<https://www.youtube.com/channel/UCq2mLfnFrWKnF0JGs44b67w>

山井綱雄公式HP
<https://www.tsunao.net/>

インタビューの詳細は本学HP「国学院大学メディア」に掲載

取材協力 国立能楽堂

インフォダイジェスト

... 在学生
 ... 保護者
 ... 卒業生
 ... 一般
 ... 受験生
 内容 日にち 時間 場所 対象 申し込み 料金 問い合わせ

大学からのお知らせ

12月・1月の大雪で災害に遭われた皆さまへ

内 昨年12月16日から大雪と1月7日からの大雪により災害救助法が適用された地域に主たる家計支持者が居住し、家計の急変で今後の学業生活に支障をきたすおそれのある学生は、保証人（保護者等）と相談のうえ下記の大学各窓口までご相談ください。

対 被害対象地域については本学HPで確認してください。

問 ▶ 学生生活課（☎03・5466・0145）

▶ たまプラーザ事務課（☎045・904・7700）

▶ 大学院事務課（☎03・5466・0142）

2・3月中の事務室開室および証明書自動発行機稼働日程

内 2・3月中の下記事務室の開室と証

明書自動発行機の稼働日時は、渋谷・たまプラーザキャンパスとも本学HPを参照してください。

▶ 神道研修事務課、教務課、学修支援センター相談室、ボランティアステーション、英語教育センター、教職センター、大学院事務課、学生生活課、保健室、学生相談室、キャリアサポート課、国際交流課、たまプラーザ事務課、図書館、コンピュータ自習室

イベント

30

「文学塾」受講生募集

内 国学院大学文学部が、高校生のための新たな学びの場として「文学塾」を開講します。文学部5学科の専任教員陣が下表のように専門性の高い内容で講義し、知的好奇心が強い皆さんの期待に応えます。今年度は、オンラインのみの開講となります。皆さんも「学ぶ喜び」を、ぜひ体験してください！

日 3月27日(土)ライブ配信

文学塾の講義一覧

中国の靈魂観—魂魄説・三魂七魄説などをめぐって—
ドイツのドイツ語標準変種
ジパングへの途—大航海時代の西洋古地図に描かれた日本
〈見て読んで考える！江戸文化〉
弥次喜多、旅に出る—膝栗毛文芸の面白さ—
旅する浮世絵—パスポートになった北斎画「冨嶽三十六景」—
福沢諭吉の江戸時代

アンケート回答者の中から5名様に読者プレゼント

アンケートに回答してくださった方の中から抽選で5名の方に、今号「特集 丑年注目の院友」でご協力いただいた国立能楽堂のオリジナル卓上カレンダーをプレゼントします。アンケートはQRコードから（締切：2月15日）。なお、当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

アンケート回答者の個人情報は法令に基づきプレゼントの発送に限り使用します。



「ガラスの城」対「家族力」

～ウィズコロナ時代の親子対話法～



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。
人間開発学部初代学部長、専門
は教育社会学、人間発達学。新しい
時代の子育て論には定評。

昨年、学生にとって学習意欲の低下がちな厳しい1年でした。親御さんからは、オンライン授業で、子どもが家に居ることが多くなったにもかかわらず、コミュニケーションが取れない、という訴えも聞かれます。コロナ禍で、私たちは、「家族力」が試されることになったと言えます。

学生たちに「家族とは何か？」と問えば、「安心できる場所」「絆の強い場所」などの言葉を返ってきます。しかし、家族は、社会集団論から言えば、夫婦間、親子間での対話がなくなれば壊れやすい、大変な社会集団なのです。それは、なぜでしょうか。

家族は、立場の違う異質者同士（男女という異性、親子という扶養者と被扶養者）の結合体です。しかも、その異質性ゆえに結合の根拠・意義を持つという、特異な社会集団です。

家族は、立場の違う異質者同士（男女という異性、親子という扶養者と被扶養者）の結合体です。しかも、その異質性ゆえに結合の根拠・意義を持つという、特異な社会集団です。

「聴く」態度で。親は、子どもの話を聞いているつもりでも、それは上から目線で聞いている場合



「聴く」態度で。親は、子どもの話を聞いているつもりでも、それは上から目線で聞いている場合



田代学局次長



鳥山泰孝監督



坂本大記監督



前田康弘監督

主催者挨拶

針本正行学長「登壇する監督は、課外活動を通して学生の人間形成に寄与し、日本の社会を、国学院大学の未来を担う人材育成で大きな力を発揮しています。本日のトークライブを端緒として国学院大学の未来を語り合えることができれば幸いと存じます」
吉田茂穂・国学院大学院友会会長「オンライン開催とは思議なもので、すぐそばに母校があるように感じます。大学と院友が一緒に作った新しい形のホームカミングデーを存分に楽しんでいただき、コロナ禍の後輩たちと一緒に後押ししていただければ大変ありがたいです」

ホームカミングデー 強化部会3監督らトークライブ 成長生み出すチームの力とは？

院友やその家族らが年に1度学舎に戻る「ホームカミングデー」は、新型コロナウイルスの感染状況を考慮し、今年度はオンラインで開催することとなり、第1弾となるスペシャルトークライブ「なぜスポーツは人に力を与えるのか」が1月9日、ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」でライブ配信された。ゲストに、サンケイスポーツ編集局の田代学局次長（平3卒・99期法）、硬式野球部の鳥山泰孝監督（平10卒・106期法）、柔道部の坂本大記監督（平10卒・106期法）、米大リーグの優勝決定戦ワールドシリーズで日本人初の公式記録員を務めた経験を持つなど、国内外の第一線で記者生活を送ってきた田代局次長と3人の監督がコロナ禍の生活で感じる学生の成長や、スポーツを通じて人材育成について意見を交わした。

監督（平10卒・106期文）、陸上競技部の前田康弘監督の4人を招き、フリーアナウンサーのトーマス・サリーさん（平20卒・116期法）が司会を務めた。

トークライブでは、米大リーグの優勝決定戦ワールドシリーズで日本人初の公式記録員を務めた経験を持つなど、国内外の第一線で記者生活を送ってきた田代局次長と3人の監督がコロナ禍の生活で感じる学生の成長や、スポーツを通じて人材育成について意見を交わした。

逆境を成長の糧に

Q コロナ禍のこれまでに振り返って

鳥山泰孝監督（以下、鳥山）

「学生たちに制限を課すことが多い。その分グラウンドでは選手自身が考えて思う存分練習や試合をできることを考えてきた。できない理由は考えず、どうやったらできるのかを考えてきた」

坂本大記監督（以下、坂本）

「柔道は組んで勝負をする競技。3密、ソーシャルディスタンスという言葉に最初は愕然とした。練習再開当初は、選手同士の間隔をあけ、

仮想の敵を思い浮かべた形づくりの練習を取り入れたことで学生の想像力やイメージ力が養われ、成長した」

前田康弘監督（以下、前田）

「自ら考え練習することが学



回路と行動パターンを身につける大学4年間にしている」と学生には話している」

坂本「スカウトで見るのは『素直な心』『信じる心』『基本ができること』『けがをしない体』。試合場には上れるのは自分一人だ。選手が正しい道を歩くように、道場でも生活でも見守っている」

前田「学生スポーツでは、勝利の過程に一番力を注がないといけない。そのために選手たちには、自分の長所短所を知ること、考える力が大事だと問いかけている。そうした過程を高めることが人間力に結びつく。結果は大事だが、それ以上に大事なものが学生スポーツにはある」

田代「記者生活で出会った印象的な指導者は陸上女子長距離の名指導者・小出義雄さんだ。豪快なイメージだが、実は彼のメモ帳には周囲の発言や選手の行動などが細かく記されている。指導者は豪快な部分を見せつつも『目配り、気配り』が必要だと学んだ。今の指導者にとって大切なのは、選手の長所を見つけ、どうやって伸ばしてあげるかだ」

指導者は目配り、気配り

努力する姿が心を動かす

Q、なぜスポーツは人に力を与えるのか。また今後の抱負は？

鳥山「学生には一生に一度の機会。活躍の場をしっかりと

確保したい。成功も失敗も、たくさん経験できる1年間にしたい」

坂本「3年後のバリ五輪には、多くの選手を出したい。スポーツは簡単でないからドラマは生まれる。だからこそ瞬間瞬間に一緒にいられることに感謝して学生に寄り添い、指導していきたい」

前田「スポーツには、競技をする姿に人の心を動かす力がある。努力の姿が見えるから人の心を動かす。日々の積み重ねを大事に、応援してくださる人たちの心を揺さぶる第98回箱根駅伝を戦いたい」

田代「東京五輪が開催されれば、サンケイスポーツの紙面を通じて多くの感動を届けた。大きい記事を載せられるような活躍を3部会には期待している」

ホームカミングデーは、今回のライブ配信のほか大人のキャンパスツアーなど、さまざまな企画がウェブ上に準備され、気軽に楽しめる内容となっている。詳細は院友会報に同封のリーフレットや本学HP（QRコード）に掲載されている。





©KGRR

1区 藤木 宏太 (神文3)
区間**12**位 | 1時間3分32秒

チームの1年間の集大成となる箱根駅伝。1区で流れをつくる走りをしたかったが、上位をキープできず、申し訳ない。次は失敗しない走りでチームに貢献する。



©KGRR

2区 中西 大翔 (健体2)
区間**15**位 | 1時間9分14秒

チームに貢献する走りが全くできなかった。もう一度2区を走り、チームに貢献できるように、スタミナの強化を中心に1年間取り組んでいきたい。来年の箱根駅伝はリベンジの大会にしたい。



©KGRR

3区 白井 健太 (健体4)
区間**7**位 | 1時間3分54秒

箱根駅伝は、最後の青春。失敗しても、負けても、成功するまで、勝つまであがくことを教えてくれた。前半は10位を追いかけたが、なかなか差が詰まらなかった。後半、自分がここでやらないといけないという思いが前に出て体がついてきてくれた。9位は悔しいが、「全員駅伝」を体現できたことが誇り。



©KGRR

4区 河東 寛大 (神文4)
区間**15**位 | 1時間4分47秒

あこがれの箱根駅伝で区間3位を目指していたが、情けない走りでチームに迷惑をかけてしまった。卒業後に進む予定の実業団で今回の悔しさを晴らしたい。



©KGRR

5区 殿地 琢朗 (健体3)
区間**8**位 | 1時間13分25秒

シード権内まで順位を上げることができ、最低限の仕事はできた。目標の区間5位以内やターゲットタイム(71分台)を達成できなかったことは来年への課題。総合9位では納得がいけないチームに成長したことが今回の箱根駅伝で大きな収穫だと思う。来季はラストイヤーになるので過去最強のチームを作っていきたい。



©KGRR

6区 島崎 慎愛 (経営3)
区間**4**位 | 58分39秒

今回の目標は区間3位だった。復路のスタートとしてチームに勢いをつけられたと思う。箱根駅伝は自分が輝ける場所。来年は区間賞をとりたい。



©KGRR

7区 徳備 大輔 (法4)
区間**7**位 | 1時間4分17秒

区間5位以内を目指したが、全力を出し切り、後悔はない。感謝の気持ちを走りて表現した大会になった。これからは教員になって、生徒に夢を持つこと、夢を追うことの素晴らしさを伝えていきたい。



©KGRR

8区 伊地知 賢造 (健体1)
区間**9**位 | 1時間5分19秒

帝京大に追いつかれてからは、状況を整理して冷静に攻めの走りができた。区間順位は悪かったが、自分の力を出し切ることができたと思う。来季に向けては、前半に突っ込んだ走りができるようにならなければいけない。スピードもスタミナも強化して、来年はチーム目標を達成できるように頑張っていきたい。



©KGRR

9区 高橋 凌也 (法4)
区間**12**位 | 1時間11分0秒

目標にしていた区間5位以内には届かなかったものの、シード権内で繋ぐことができた。今回の箱根駅伝は競技人生の集大成。この経験を糧に社会人として恥じない人物になりたい。



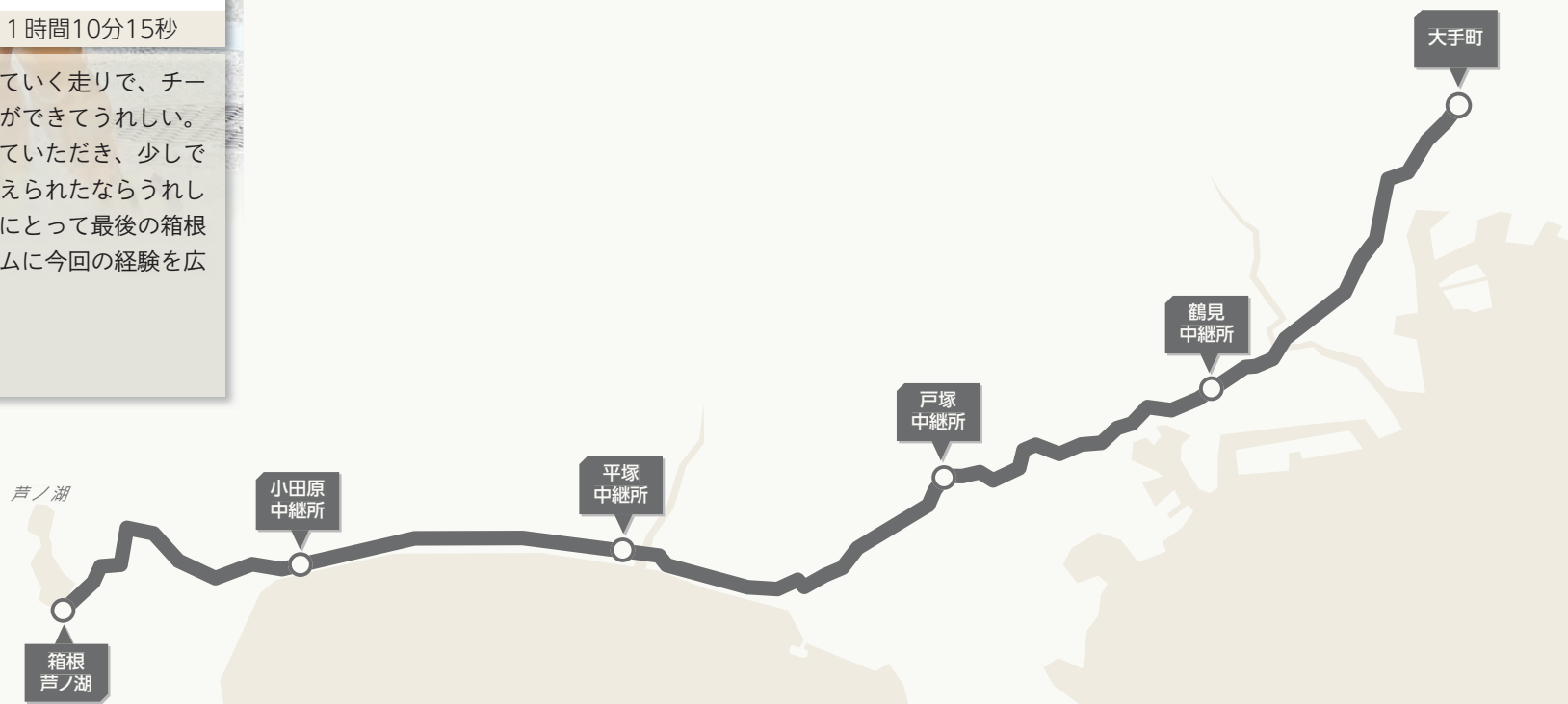
©KGRR

10区 木付 琳 (主将・経3)
区間**3**位 | 1時間10分15秒

1つでも前を追っていく走り、チームに貢献することができてうれしい。たくさんの人に見ていただき、少しでも勇気や感動を与えられたならうれしく思う。来季は私にとって最後の箱根駅伝になる。チームに今回の経験を広めていきたい。

逆境力に 総合力でつかんだ シード権

目標としていた総合3位には届かなかったものの、3年連続のシード権獲得を果たした陸上競技部。のぼり旗も声援もない異例の箱根路を駆け抜けた選手、監督からはコロナ禍の中、開催を実現できたことへの感謝の気持ちとともに来季への収穫と課題が聞かれた。



滝川市から体育部会合宿所に コメ30俵寄贈

合宿所で寮生活を送る硬式野球部、柔道部、陸上競技部、剣道部、ラグビーフットボール部などに対して昨年11月18日、国学院大学北海道短期大学部がある北海道滝川市から市内産のコメ30俵が贈られた。滝川市では毎年、陸上競技部が合宿を行うなど交流が続いている。
滝川市からは昨年6月、北海道短期大学部に在籍する全472人の学生にコメ5kgが贈られている。



卓球部 関東学生選手権 小島選手4位、小畑選手13位

関東学生卓球選手権大会が昨年12月12日、13日に駒沢屋内球技場で、18日に所沢市民体育館で行われた。今年度は男女のシングルスのみが行われ、国学院大学卓球部からは男女23人が出場。女子で小島叶愛選手(初教3)が4位、小畑美菜選手(初教2)が13位に入った。

ノーシードから勝ち上がった小島選手は、5回戦で卓球のプロリーグ・Tリーグでも活躍する梅村優香選手(中央大)に勝って勢いに乗り、昨年度の全国大会で敗れた岡崎日和選手(東洋大)に逆転で勝利、第1シードの選手を破って勢いに乗る工藤夢選手(中央大)も僅差で退け準決勝に進んだ。Tリーグにも出場する木村香純選手(専修大)との準決勝は、序盤からペースを握られ0-4で敗れた。

試合後、小島選手は「新型コロナウイルスの感染拡大で練習が制限される中、本学ではいち早く再開できた。そうしたことへの感謝の気持ちを結果で表せてよかった。個人で初めて上位に入れて素直にうれしい。久しぶりに試合ができて楽しかった。練習できたおかげで自信を持って試合に臨めた。次の全日本選手権でも一戦一戦しっかり力を出して勝たれるように頑張りたい」と手応えを口にした。



ニッタクニュース提供

団体個人の成績

ラグビーフットボール部=関東大学リーグ2部リーグ戦が昨年11月1日から29日まで行われた。今季は所属する8校を2つのブロックに分けて4校総当たりのリーグ戦を行ったうえで、両ブロック同順位同士で順位決定戦を行った。Bブロック1勝2敗で3位となった同部は29日、今季最終戦となるAブロック3位の拓殖大との順位決定戦に挑んだ。

試合は開始7分に齋藤響選手(神文2)のトライで先制すると、互いにトライとゴールを奪い合い一進一退の攻防に。後半30分過ぎに21-26とこの試合初めてリードを許したが、終了間際にゴール前の攻防から1トライ1ゴールを挙げ28-26と逆転し有終の美を飾った。

蹴球部=関東大学サッカーリーグ2部への昇格をかけた第53回関東大学サッカー大会昇格決定戦が昨年12月30日に行われた。今季の東京都大学サッカーリーグ1部で3位に入った同部は、予選リーグを2勝1敗で突破。10年ぶりの出場となった昇格決定戦では、東海大と対戦した。試合は、前半を両チーム無得点で折り返したが、後半24分に失点。その後も得点を奪えず0-1で敗れ、関東リーグ昇格は果たせなかった。

ソフトテニス部=例年春に開催されていた関東学生ソフトテニス選手権大会が、男子は昨年12月6日に千葉県白子町で、12日に早稲田大・所沢キャンパスで、女子は5日に白子町で行われた。試合は男女のダブルスのみが行われた。

男子は、全213ペアがエントリーし、同部からは8ペアが出場。小出尚典選手(史3)・藤木敦也選手(神文3)ペアと西本一雅選手(健体1)・佐藤大和選手(健体3)ペアがベスト16に入った。

女子は118ペアがエントリーし、同部からは5ペアが出場。久米夏子選手(法2)・木村美月選手(初教2)ペアのベスト32が最高だった。

前田 康弘 監督

4年生は要所で思いのある走りをしてくれ、初出場の学生も臆せず力を出せた。最後は総合6位も狙えたのでそこまでよかったが、往路劣勢の中、粘り強く継走してくれた。一番の収穫は9位に満足していないことだ。シード権を取っても泣いている選手もいる。そこに一番の成長を感じている。チームとしての課題が見えた大会でもあった。連続のシード権獲得に満足することなく、来季は上位進出を狙っていきたい。
学生が考えたことを尊重して、新しいチーム作りをしていきたい。

K:DNA——創立139年目を迎えた国学院大学の**遺伝子**…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

陸上競技部

粘り強く総合9位 一箱根駅伝

第97回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）は1月2、3の両日、東京・大手町―神奈川県箱根町の芦ノ湖畔往復の10区間、217.1kmで行われ、5年連続14回目の出場となった国学院大学陸上競技部は、11時間4分22秒で総合9位（往路9位、復路6位）となった。新型コロナウイルスの感染防止対策の一環として沿道での応援自粛が求められた今大会は、10区で逆転した駒沢大が10時間56分4秒で13年ぶり7回目の優勝を飾った。

前回大会で過去最高の総合3位の本学は、「覚悟と証明―歴史を継承し、新たな未来へ―」をスローガンに、「総合3位」を目指し大会に挑んだ。

往路は、3年連続の1区・藤木宏太選手（神文3）が中盤にトップに立つなど果敢な走りを見せたが、区間12位に後退。2区・中西大翔選手（健体2）を終えて15位まで後退したが、3区・臼井健太選手（健体）、4区・河東寛大選手（神文）の4年生が粘って12位で5区に襷を繋いだ。前回大会10区で逆転劇を演じ、総合3位の立役者の一人となっ

た5区・殿地琢朗選手（健体3）は、レース前の取材で熱く語っていた山登りへの思いを体現する力走で上位を猛追。順位を3つ上げ9位で芦ノ湖のゴールに飛び込んだ。

先頭から6分44秒差でスタートした復路。6区・島崎慎愛選手（経営3）が、2年連続の山下りで昨年の自身の記録を上回る区間4位の快走を見せ、順位を1つ上げた。最初で最後の駅伝となった7区・徳備大輔選手（法4）、1年生で唯一エントリーした8区・伊地知賢造選手（健体）は、それぞれ8位を維持。シード権争いも激しさを増す9区・高崙凌也選手（法4）は一時11位まで順位を落とす苦しい走りとなったが、残り3km辺りから猛烈な追い上げを見せ9位で鶴見中継所に駆け込んだ。

シード権奪取へプレッシャーがかかる最終10区を任された主将の木付琳選手（経3）は、一時は6位集団に追いつくなど区間3位を記録する快走を見せ、総合9位でゴールテープを切った。

【監督、選手のコメントはⅡ・Ⅲ面】

第97回箱根駅伝（総合順位）

順位	大学名	記録	順位	大学名	記録
1	駒沢大学	10:56:04	6	早稲田大学	11:03:59
2	創価大学	10:56:56	7	順天堂大学	11:04:03
3	東洋大学	11:00:56	8	帝京大学	11:04:08
4	青山学院大学	11:01:16	9	国学院大学	11:04:22
5	東海大学	11:02:44	10	東京国際大学	11:05:49

以上、シード権獲得（以下略）



©KGRR

悔しさをにじませゴールする10区・木付琳選手

未来につなぐ 学術資産研究／一ト

》近世の神社・神職の実態を伝える文書群

宮地直一旧蔵「羽田野神主家文書」

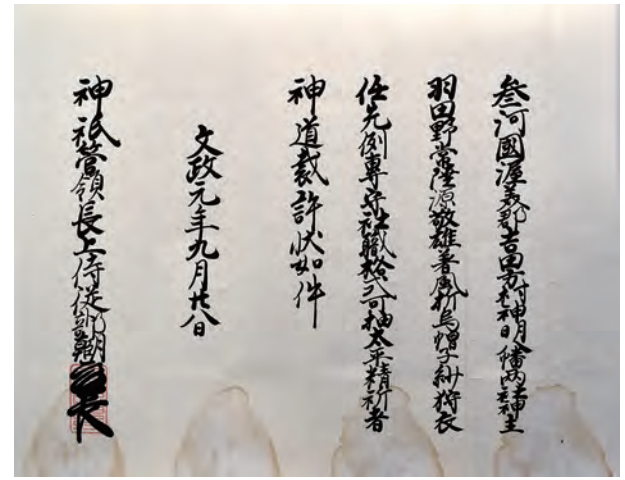
国学院大学所蔵の「羽田野神主家文書」は、三河国渥美郡（現・愛知県豊橋市）の羽田八幡宮・神明宮の神主を務めた羽田野家伝来の文書群である。近世後期に神主となった羽田野敬道と、その養子として文政元（1818）年に跡を継いだ敬雄ほか、関連資料を中心とする。敬雄は同八幡宮境内への文庫開設のほか、学芸方面でも精力的に活動したことで知られる。

本資料は、神主として風折烏帽子・狩衣という装束着用の上で奉仕が許された「神道裁許状」と呼ばれる許状のほか、各種の許状、霊神号（故人の尊号）、疫病祭や病氣平癒などの祭儀・祈禱の次第書などを含む。これらは近世後

期～末期、京都の吉田家（吉田社の神主職および神祇官の次官職を世襲した家）より受けたものである。加えて、吉田家中とやり取りした多数の書簡や控えなども伝来しており、近世における地方の神社・神職と、全国の神社・神職に大きな影響を及ぼした吉田家との交流実態を示す資料としても貴重といえる。

本資料は令和2年度、研究開発推進機構の日本文化研究所と学術資料センターにより調査・整理が進められ、国学院大学博物館の神道展示室で、資料の一部が展示されている（2月20日まで）。

吉永博彰（研究開発推進機構助教）



「神道裁許状」（文政元年9月28日）
国学院大学博物館所蔵